みょうな相性

●あらすじ●（この物語はフィクションです）

エス男はパッとしない男子校生。

ある夜、彼の下に美人王女ミレット＝エムーコ（仮）が現れる。

恵まれない人間に当局が派遣したスタッフである彼女は、

思春期の男性に相応しい奉仕を行う。

そうして甘く熱い時間が始まるが、ふたりにはある秘密があった。

●登場人物●

・エス男：パッとしない男子校生。童貞。

・ミレット＝エムーコ（仮）：当局のスタッフ。王女のような美人。

●分量●

文庫本で一〇〇Ｐ強

●制作●（二〇一六年九月現在）

・小説　木森山水道（別名義　きもりや）（サークル　夜山の休憩所）

ブログ　http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/　（夜山の休憩所のブログ）

http://b.dlsite.net/RG11385/　（夜山の休憩所の Blog）

ツイッター　https://twitter.com/kimoriya2（きもりや）

・挿絵　「セックスライフ」より（G’J?　社）

公式サイト　http://www.teck.jp/gj/

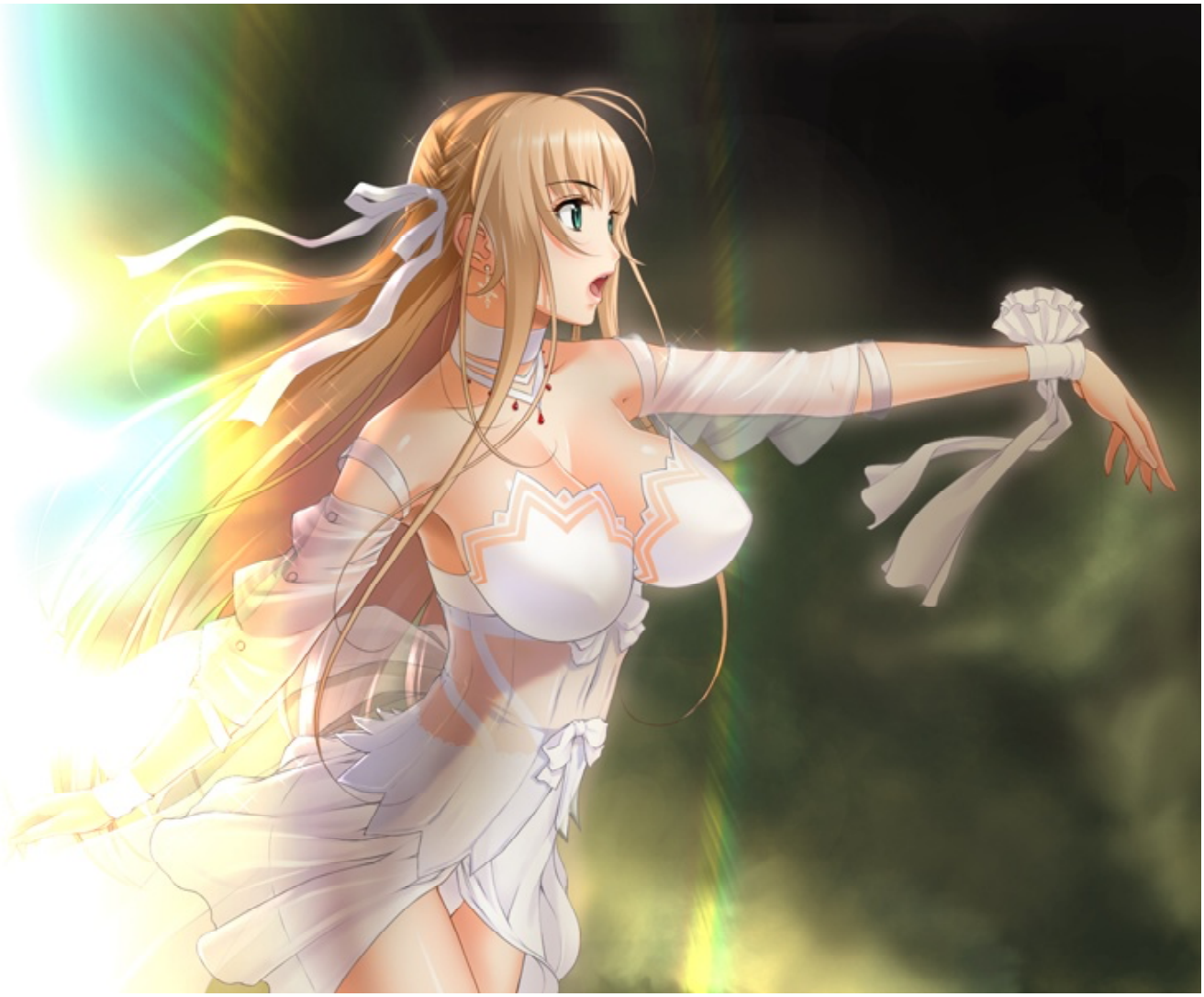
利用規約　http://www.teck.co.jp/gj/products/sano/qa/qa.html

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」のシリアルコード

S/N:GJ0079908

それは暑く悩ましい夜のこと。
適当に夕飯を済ませたエス男は、エアコンを効かせた自室のベッドに転がっていた。
フローリングの六畳間の四隅には、寝具に本棚、勉強机を兼ねたパソコンデスクがそれぞれぴったりくっついており、真ん中はひらけている。読みかけの本や間食の袋が散乱していることのない片付いた部屋には、日が落ちて間もない頃だというのにカーテンが引かれていた。なにしろ憂鬱なのだから、閉じこもりたい気分なのだ。
「はぁ……困ったなぁ……」
手足を投げ出した仰向けで、見るともなしに天井を見ながらため息をつく。
「オレってば、またこんな成績をとっちまって……」
首を巡らせ、枕元の紙を見る。学園の成績表であった。
男子校生であるエス男は成績が悪い。
小さな頃から勉強も運動も不得手だった。
できないことが恥ずかしくて、できるようになろうと努力することもあるが、甲斐はない。そういうところも含めて、デキが悪いということなのだろう。
「親に見せたら、たっぷり油を絞られるに決まってる……嫌だけど、見せないわけにはいかないもんなぁ」

両親は親戚の元へ出かけていて、数日は帰らない。
その間に、できるだけ叱られたり小遣いを減らされたりしない方法を見つけねば。
エス男はぼんやり考える。
と、部屋の照明が消えた。
「え……？」
驚いて固まる。
だが次の瞬間、もっと驚くべきことが起きた。
ガチャッ、キーッ……。
どう考えても、ノブが回され、ドアが開いていく音だ。
驚きの硬直が恐怖の凍結へ移行。
家にいるのは自分だけ。
ならば今、閉めていた出入り口を開けたのはだれ？
（ど、泥棒なのかっ……それとも強盗？　……まさかお化けの類いとか……？）
なんにしても、ろくなものではない。
緊張と怖れで動くに動けず、ただ冷や汗をかく。
と、今度は出入り口が強く光った。



「今度はなんだよ!?」
光の爆発と言いたくなる無音のスパークの中に、見知らぬ誰かが。
か細い手を突き出して、ゆっくり部屋の中央に向かっている。
「うわっ、すっげぇ可愛い女の子！」
固まっていた男子校生は、目を見開いて見入る。
ポーズといい、それをしている女の子といい、なんとも神秘的な光景だった。
それは、真っ白くて細長いリボンを緩く巻いた長い金髪の女の子。
年頃は自分と同じ位か。
知的な顔立ちをしているが、インドア派にはない快活な雰囲気がある。
カラダは別の意味でもっと快活だった。
形も大きさもメロンと言いたくなる胸元、カボチャ大に育った桃型のお尻、もちろんくびれも色っぽく細い。
学園どころか売れっ子アイドルもそこのけの成熟ぶりである。
しかも、衣装がまたすごい。ほとんど、胸のカップとベビードールだけなのだ。
純白の物で固めて神聖な雰囲気を醸し出してはいるのだが、肉体を隠すというよりも男好きするカラダをエッチに飾るデザインだった。赤子のようにきめ細かい肌がかなり露出

しているのが、なんとも艶めかしい。
豊満な胸元のカップなどは、その先っぽしか覆っていない。生白くてなめらかな乳肌は、全体の三分の二は大盤振る舞いされている。
鳩尾から下の部分は、スケスケのベビードール。スカート部分もそうなので、ハイレグ」バックの瑞々しい股間も、そこから伸びる白く輝くような太ももも、うっすらと見えてしまっていた。
「エロ可愛いすぎる……まるでラノベとかのお姫様キャラじゃないか……」
性欲旺盛な男子校生らしい視線でじろじろ見ていたら、王女が止まった。
すると、光の爆発が消えた。入れ替わるように照明が復活する。
シーリングの白光の中でも幻想的なまでに綺麗な彼女は、部屋の中央で静かに挨拶。
「はじめまして。ミレット＝エムーコと申します」
容姿端麗な女の子は、声まで綺麗だった。
よく澄んで儚げではあるが、か弱さを感じない美声の持ち主は、丁寧に頭を下げる。
（うおっ……見た目も声も最高のお姫様のオッパイが……オレの前で揺れてる！）
裸に近い乳房が重たげに上下動する様子に、エス男が生唾を飲む。
人一倍冴えない自分は、もう二度とこんないいものを見られるわけがない。

目に焼き付けるつもりでじっくり見る。
上品な会釈が終わってもしつこく視姦し続けていると、彼女は首をかしげた。
「どうかしましたか？」
「……なんでも」
そろそろ限界か。下心を見破られる前にと思い、目を離す。
見知らぬ王女は、彼女にぴったりの気品ある微笑を浮かべた。
「そうですか……ところで、あなたはエス男様ですね？」
「はいっ、オレ……いや、ぼ、ぼくはエス男ですが……ミレット王女はどうしてオレのことを……それに、どうしてここに……いやいや、そもそもこれは現実なのか？」
訊ねられたことで訊ねるべきことが浮かんで質問すると、彼女は親しげに微笑む。
優雅な所作で華奢な腕を振った。胸の谷間に細い手指を差し込み、紙片を取り出す。
名刺だ。
「わたしは、【一億総希望実感プロジェクト】のスタッフです」
ある意味、えらく現実的な返事だった。
「はぁ……」
反射的に受けとって、まじまじと見る。

そこには、言われた肩書きと日本人らしい名前が。
どうやら、金髪のお姫様はコスプレのようだ。
ミレット＝エムーコというのも偽名らしい。
一体全体、どういうことなのか。
「政府が実施する【一億総希望実感プロジェクト】はご存じですか？」
「いえ」
役所の窓口みたいに事務的な言葉に、新聞もニュースも見ない男子校生は首を振る。
「では、ご説明させていただきます。【一億総希望実感プロジェクト】とは、国民の皆様に希望をもって豊かな人生を送っていただくための施策となっております。人生が上手くいっていない方に生きる幸福を実感してもらい、そうすることで希望をもっていただくという具合です」
「なるほど……」
「失礼ながら、勉強も運動もできず、恋人のひとりもいないエス男様は、当プロジェクトの対象であると、当局が判断いたしました。それで、わたしが派遣された次第です」
「ダメなオレだから、選ばれたわけですね」
「はい、簡単に言えばそうなります」

コスプレお姫様こと若い美人お役人は、意外と妙にはっきり言った。
「事前にお手紙でお知らせさせていただいておりましたが、どうやらご覧になっておられないようですね……本日お伺いする許可は、お電話でご両親からいただいておりましたので、ご本人も了承済みとばかり……」
そのとき、枕元のケータイが鳴った。
母からだ。
『あーエス男？　夕ご飯食べた？　ところで、言い忘れてたんだけど、今夜、【一億総希望実感プロジェクト】っていうののスタッフさんが来るそうよ。あんたにいいことしてくれるんだって。よかったわね。それじゃ、失礼のないようにね～』
電話が切れる。
「……いや、もちろん聞いていました。当然、了解済みですよ」
話を合わせる。
身分は確かなようだし、エロ可愛いお姫様のコスプレがとんでもなく似合う美女子なのだ。了解が取れていないことを理由に帰られでもしたら、一生後悔するかもしれない。なにせ自分はダメ男。ついでにいうとモテもしない。こんな貴重な機会は、一秒でも長く続いて欲しい。

「けど、どうやって家の中に？　戸締まりはしていたはずですが」
「ご両親にご協力いただきました。この家はIoT（Internet of Things）の家ですから」
「母さんめ」
連絡をもらって家に招き入れたとき、息子に知らせてなかったことを思い出したのだろう。タイムラグがある気もするが、親戚のところで名物を堪能したり、のんびりしたりするのに忙しくて、今し方ようやく教える気になったというところか。デキの悪い息子にはうるさいが、自分にはとことん甘い親なのだ。
「勝手に照明が落ちて、光がパァッてなったのは？」
「エス男様が学園に行っておられる間に、仕掛けをさせてもらっておりました」
「なんだってそんな面倒くさいことを」
「なぜって……」
美女子が自分のカラダを見回した。
「お好きなのですよね、こういうプリンセスを……事前調査させてもらっていましたが」
「大好きです。ミレット王女は最高ですよ！」
是非もない。
美女子を見つめ、同時にその背後の本棚を視界に収めながら、鼻息を荒くする。

そこには、エロ可愛い王女がヒロインのライトノベルや漫画やゲームが詰まっているのだ。
「ありがとうございます……それで、こんなコスプレに合うように、登場を盛り上げたわけでした」
「いろいろな意味で、こちらこそありがとうございますという気持ちですよ」
「恐縮です」
「いいものを見せてもらいました。心に希望が湧いてきた気分です。明日から頑張れそうですよ。【一億総希望実感プロジェクト】でしたか？　国ってこういう粋なこともするんですねぇ」
「そう言っていただけると嬉しいです……ですが、わたしのお仕事……いえ、エス男様へのご奉仕は、お好みの姿をお見せするだけではありません。これからが本番なのですよ？」
意味ありげに告げ、はにかんだ笑みを浮かべる美女子。
清潔なグローブの手指が胸のカップに触れた。
剥がれるように下着が外れていき、乙女の乳房が裸になる。
「……うッ！」
見事な球体乳房だった。

下着の補正機能から解放されても、張り詰めた肌はメロンじみた軌跡を描いている。
透き通るような肌の豊胸は、その先端も美しい。
乳輪も丸い乳首も土台と均整がとれていて、しかも瑞々しいピンク色。
見ているだけで男の証がムズムズする色気がある。
「これが女の子のナマオッパイ……初めて見た」
着衣していたとき以上に視線で食いつくエス男。
パッとしなさすぎる男子校生は童貞であった。
さらにいえば、モテなくても女性に興味津々のお年頃でもある。
滅多にお目にかかれない美乳を前に、平静でいられるわけがない。
しかも、嬉しいことが加速していく。
「ゆっくりご覧ください……わたしのカラダは、今はエス男様のものなのですから」
口調と雰囲気が変わってきている。
役所の窓口のそれから、コスチュームと設定通りのお姫様にシフトしていく美女子は、
ベビードールやTバックショーツにも触れていった。
しとやかな所作で、けれど男の興味が尽きない部分を見せつけるアングルで、音を立てずに脱いでいく。

「う……うおおっ……！」
くびれの細さやお腹の贅肉のなさが際立つ直立姿勢で衣服を脱ぐ。それが済むと後ろを向いた。ウエストを微妙に振り、尻タブに波紋を広げ、脂ののったお尻の魅力を存分に振りまきながら、エッチな下着を外していく。
「こんなにエロ可愛いお姫様がストリップみたいなことを……ああッ、スケベすぎる！」
叫ぶ童貞。
目はすっかり血走っていた。
衣服の下ではペニスが猛っている。熱く硬く膨らんで、限界点まで向かっていく。
「粗末なカラダで申し訳ありませんが……気に入っていただけたのなら幸いです」
結局、王女は他の衣服や装飾品も外し、リボンだけを残した。
胸の谷前に細腕をねじこみながら両手を組み、そうして、可憐ではあるが豊胸の量感を妙に強調するという、挑発同然のポーズをとって、嬉しそうに微笑する。
「う……あああああッ……！　同じ位の年の美人が……スケベな裸を見せてくれてる！」
王女姿にも性欲をかき立てられたが、ささやかなシンボルのみとなった今も、どうしようもなく興奮させられた。
こんなダメ男に裸を見せてくれるなんて。

嫌な顔をするどころか、まるで初セックスをする恋人に見せるような、恥ずかしさと悦びが混ざったエッチな笑顔を見せてくれるなんて。

「エス男様も裸になってくださいね。脱衣させてもらいますから」

そう言うと、美人王女がベッドに上がってきた。

エス男の無骨な手をそっと握ると、ベッドの下へ導く。フローリングに立たせつつ、野暮ったい部屋着に触れてきた。

「え……ええっ……!?」

愛息子に接する母のように、優しく部屋着を脱がせていく。

「あうぅ……お姫様がオレを裸にしてくれてる……！」

冴えない男子に対する嫌悪感やなおざりな気持ちなど、少しも感じなかった。

だからこそ嬉しい。脱がせやすいように手を振り、あるいは足を上げてみると、共同作業をしている実感で悦びが増す。彼女との心の距離が縮まった気がして有頂天になる。

破裂しそうな位に胸がドキドキしているが、鼓動はひたすら甘かった。

「ご協力ありがとうございました」

男子校生を裸にした王女が優しく微笑む。

そのまま足下に跪き、思春期男子のペニスを見る。

取り乱した様子はない。慣れた様子で鑑賞してくる。
「あわわっ……見られてる……こんな美人にオレなんかのチンポが見られてる！」
他の者ならすぐさま逃げ出すところだが、とどまる。
微笑みながら裸を見せてくれたり、脱がせてくれたりした女の子なのだ。
こういうことに積極的な美人になら、むしろ見られたい位だった。
それに、打ち解けた女の子に性器をじっくり見られるのは悪くない。
妖しい快感が全身を駆け、いきり立っていた分身が完全に勃起する。
「立派なオチンチンをお持ちなのですね」
鼻先でペニスと対面する王女は、優しい声で褒めてくれた。
「そ、そう……？」
「そうですとも」
嘘を感じない上目遣いで微笑むプリンセス。
もっとも。
本当は嘘だろうが。
自分のペニスが人並み程度だということは知っている。
勉強も運動もできないが、性器のサイズならあるいは。

すがるような思いつきに背中を押され、ものの本で平均値を調べたことがあるからだ。
修学旅行先の大浴場では、特大フランクフルトみたいな巨根をいくつも見ている。
これまでの様子からすると、このコスプレ王女はこういうことの経験が豊富なのだ。
ならば、眼前の童貞ペニスがたいしたことはないと知っていて当然ではないか。
しかし、嘘でも嬉しかった。
なにせ、自分好みの美人に褒められたのだから。
うっかり騙されそうな位、上手に賞賛されたのだから。
「と、ところでさ……」
震える声でエス男が訊ねる。
王女への親しみが増したせいで、他人行儀の言葉遣いが崩れ始めていた。
「お、お互いに裸になって……勃起チンポの前で跪いてくれているってことは……」
「はい」
「奉仕がどうとか言ってたし……やや、やっぱり……そういうことなの……？」
「お考えの通りです」
「ッ!?」
「わたしがエス男様に性的なご奉仕をいたします」

「や、やっぱりそういうことなんだ！」
「思春期のモテない男性には、こういうのが一番ですから」
「他の奴はわかりませんが、オレはその通り！　いやぁ、国もわかってる」
「恐れ入ります。ところで……」
そこで言葉を切る王女。
まるで十歳も上の大人の女みたいに、艶やかに微笑む。
「パイズリはご存じですか？」
「え!?」
色っぽい眼差しで童貞の目を見つめながら、下乳を掬って胸元を上げ、ゆっさゆっさと揺らしてくる。
直前の言葉やどこか淫らな顔つきといい、胸奉仕をねだるジェスチャーにしか見えない。
「お、オッパイでチンポを挟んで……扱いてくれるプレイ……！」
突っ込ませてもらえる期待感で、ペニスを鉄のように硬くしながら叫ぶエス男。
「はい。粗末な胸で申し訳ないのですが……」
「いやいやいやいや！」
自己否定の言葉を頭をぶんぶん振って遮る。

「オレのチンポなんかより、そっちのオッパイこそ立派だよ！　ちょーレベル高過ぎっ！
それでパイズリしてもらえるなんて、こんなに幸せなことはありえない！」
「そこまで褒めてくださる男性になら、やり甲斐もあるというものです。精一杯、ご奉仕させていただきますね」
「是非ともお願い！」
腰を突き出すエス男。
斜めにそそり立つ童貞勃起が根元から大きく揺れた。
ペニスは最高潮に膨らんで、痛い位。一刻も早くして欲しい。
「ただ……始める前に知っていただきたいことがあるのですが……」
だというのに、おずおずと切り出された。
「わたし……こういうお仕事をしているので……褒めていただけたのはありがたいのですが、この胸は……」
「うんっ」
焦れったく思いながら聞いていたエス男でも、言わんとしていることにピンときた。
真面目そうな態度とこれまでの振る舞いを考えれば、劣等生でもわかる。
コスプレ王女の美巨乳は、奇妙だが嬉しい政策のスタッフとして、これまで多数のペニ

スを食ってきたに違いない。そういうことを明け透けに言えない性格なので、言いよどんでいるのだろう。
「わかるよ、肉便器なんでしょ！」
機先を制してハッとする。
パイズリして欲しいあまり、かなり焦れていたせいで、下品に言ってしまった。
いくら相手が気さくでも、自分たちは初対面の間柄。意味はわからなかったとしても、便器などというネガティブな言葉を強く言われて、傷つかないわけがない。
急いで取り繕うとしたが、その前に信じられない返事をされた。
「はい、肉便器なんです」
かなり下劣なスラングのはずだが、完璧に通じたらしかった。
しかも傷つくどころか、ズバリ言われてホッとしたような顔をしている。
「ただわたしは……やはり胸のことなので、パイ便器と呼んでいるのですが……」
恥ずかしそうに眉根を寄せながら、えげつないワードで言い直してくる。
「は、はぁ……」
なんと答えていいかわからずに生返事をしたとき、今度は即答できる質問がきた。
「それでも構いませんか？　わたしのパイ便器で搾精ご奉仕させてもらっても……」

「まったく問題なし！」
他の奴と交わった胸に扱かれるなんて気持ち悪い。
そういう男もいるだろうが、エス男の気持ちはぜんぜん違う。
「早く頼む！　ミレット王女の世界一のパイ便器オッパイで搾精パイズリしてくれよ！」
こんな極上オッパイにパイズリされることなど、二度とないに決まっている。
経験済みだからという理由で、好機を逃すなど考えられない。
それに、だ。
経験済みと言うことは、テクニックを期待できるということでもある。
これほどのオッパイがテクニシャンだなんて。
気持ちよく射精させる目的で動き回ってくれるだなんて。
考えただけでも射精しそうだった。
「あん……は、はい……エス男様のオチンチンに、パイズリご奉仕いたします」
淫乱な期待で大きく跳ねたペニスに驚いた王女だが、すぐにニッコリ微笑んだ。
支えるように持っていた下乳を広げ、内側が完全に離れるまで谷間を拡張。
胸元を寄せながら、できた大きな隙間でペニスを呑み込む。
そうして完全に迎え入れると、左右の乳房を真ん中に向かって押しつけて、ペニスを閉

じ込めてしまった。
「うぅぅぅッ！　くふぅっ……おおおおおオオオ！」
弾かれたように天井を見るエス男。足の指を丸めて背伸びをし、震えながら硬直する。
「なんだこれ……！」
温かいというよりも熱めの柔肉。
見た目通りの重さを持つその塊に、隙間なく包み込まれている。
しかも、四方八方から常に圧力がかかっていた。
吸い付いてくる感じはあるが、へばりつくという具合ではない。
張り詰めた乳肌は猛烈な反発力を持っていて、弾く風に押してくるのだ。
「気持ちよすぎるッ！」
快感は想像を絶した。
利き手でするオナニーなど、比べものにならない。
自分の手などより、何百倍も気持ちいい。
今にも腰が砕けそうな快楽に、勃起ペニスは歓喜していた。
何度もピンと突っ張って、早くも先走り汁を漏らしている。
「オレのチンポ、丸ごとオッパイに抱きしめられてる！」

快感の原因は、性器で覚える悦びだけではない。
自分の粗末な童貞ペニスが、類い希な美人の最高の美巨乳に包まれている。
それを間近で見下ろすのも、なんとも気持ちいい。
劣等感しか知らない心に、優越感や満足感の甘さが広がり、ペニスで感じる甘美を何倍にも増幅している。
「ウフ……まだ始まったばかりですよ」
「うぅッ！」
乳房を持つ手を中央にスライドさせて、ペニスをより強く抱き込む王女。
そのまま乳肉全体を勃起の根元に押しつけて、亀頭を露出させた。
挟まれただけで先走り汁を漏らしていた先端が顔を出す。
「まぁ」
位置をずらしている間に、牡肉塊はすっかりカウパーまみれだった。
一人前にエラの張った赤く初々しい全身は、室内照明を浴びて照り光る。
「先走りのお汁で濡れて……ビクンビクン跳ねていて……可愛いわ、チュ」
首を伸ばし、亀頭の突端にソフトなキス。
「あぁっ……チンポにキスされた……こんな美人がオレにチンポキスしてくれた！」

口紅抜きでも桃色の瑞々しい唇。
それが敏感な場所に優しく触れてくれた悦楽で、ペニスが根元まで震えた。
挨拶のハグを連想させる愛情表現そのものと言った仕草は、心まで甘く満たし、腰の奥からの熱い排泄衝動を起こした。
「うあぅっ……！」
口づけされたペニスから、また先走り汁が溢れた。
まだ触れている王女の唇が濡れていく。
「あんッ……チュルル……キスでもこんなに感じてくれるなんて……ンチュ、ク」
美人は嬉しそうに目尻を垂らした。
穏やかな吸引を行って、尿道を通って出る汁を口に受け入れ、静かに嚥下。
「ぁ……あああ……オレのカウパーを飲んでくれてる……ッ！　う、嬉しい！」
亀頭も尿道も揺すぶられる振動快感に、太ももの裏が突っ張る。
感激が性感を高め、断続的にだが数分間も先走り汁が溢れてしまった。しかし王女は、少しも嫌そうな素振りをせずに、飲み続けてくれた。
「ペニス、落ち着きましたね……ぺろ……でも、まだ硬いです」
王女は唇を離した。

まるで恋人を見るような熱い目で、今までキスをして体液を啜っていた亀頭の先端を見つめている。
唇についた汁を舌なめずりで拭いながらしているので、猛獣に狙われた気分だった。
なんかこの女の子、チンポも男の汁も食い足りなそうにしてないか？
「そりゃ……カウパー吸い上げチンポキスはすごくよかったけど……オナニーなんかよりもずっと最高だったけど、射精してないもんな……ふぅ」
そんなことを言いつつ一息つく。
余韻も気持ちいいものの、本命を排泄していないだけに、ペニスはだいぶ疼いている。
すぐにでも右手で手荒く扱いて、出してしまいたい位だった。
しかし、そんな作業は不要なのだ。
「もちろん、今のがさっき言った本番ではないですよ」
狙い澄ましたように、王女。
「カウパー吸い上げチンポキスが本番じゃないんだよね？」
「はい。カウパー吸い上げチンポキスが本番ではありませんよ」
悪戯っぽく笑って、下品な言葉を言い返してくれるや、本番を始めてくれた。
「パイズリが本番です」

華奢な両手に今まで以上に力を込める。
乳房を上げて寄せる仕草を行い、隙間なく挟んだペニスを扱く。
「ぐぅああッ……！」
パイズリ快感に呻く、童貞男子校生。
刺激されるのは竿全体。
根元からてっぺんに向かって、ゆっくり同じリズムで扱かれる。
ぬっこ……ぬっこ……ぬっこ……ぬっこ……ぬっこ……。
肉の幹にくまなく吸い付いてくる乳肌。
生白い美肌は若い反発力を発揮していた。
その上からは、見た目以上の重さと手の力がのしかかってくる。
乳房に張り付かれ、表面そのものとなった皮は、中の勃起肉を容赦なく研磨。
「ッぅぅぅう〜〜〜！　なんだこれぇッ！　き、気持ちよすぎるぅッ！」
挟まれたときに叫んだ言葉を、そのとき以上の歓声で繰り返す童貞。
包まれ、吸い付かれ、跳ね返され、圧迫され、擦過。
種類の異なる刺激を同時に味わわされる。
下から上へと扱くときは強く、上から下へ戻る際は力を抜いて軽く。

そんな緩急が悦楽を際立たせる。
「これがパイズリぃ……!?　はあっ……はあっ……うッ……うぅぅッ……！」
上へ搾られただけで、頭が真っ白になるほどの快感なのに。
何度も何度も味わわされる。
童貞のカラダもペニスも、一往復される度に堪らなそうに背伸びした。
太ももの裏が盛大に突っ張る一方、分身からはまたもや先走り汁が。
溢れて頂点で玉になり、胸奉仕の衝撃で壊れて、亀頭を伝って谷間に染みていく。
ぬちゅっ……ぬちゅっ……ぬちゅっ……ぬちゅっ……ぬちゅっ……。
胸淫に粘っこい水音が伴い始めた。
乳肌とペニスの間に割って入り、潤滑油と化した汁により、快感の質が変わる。
「くぅぅぅッ……！　くふぅぅぅぅ……！」
肉の吸いつき具合いが増し、同時にすべりがよくなった。
王女も少し動きを早める。
「んっ、ふっ、気持ちいいですか？　はぅ、んふっ、もっと気持ちよくなってくださいね」
お尻を起点に金髪が躍るほど上体を弾ませ、より早く力のこもったパイズリを実行。
「うああっ……はぁッ、はうぅっ……くぅ！」

快感の塊になっていたペニスは、燃えるように熱くなり、さらに先走り汁を出す。
その一方、腰の裏も猛烈に熱くなってきた。
生殖関係の器官の隅々が粘くうねるような、射精直前独特の衝動がこみ上げてくる。
「うおっ……で、出るぅぅ……！」
悟って思わず叫ぶ。そのとき、
「まだダメです」
ぎゅうぅぅぅぅぅ！
なだめるように言った王女は、乳肉で根元を締め付けた。
射精を止めたのだ。
「うあっ……出そうで出ないッ……！」
排泄の悦びを邪魔された童貞は、荒々しい気持ちで問い詰める。
「なんで!?」
「せっかくのパイズリだからです」
「はあ……はあ……？」
「エス男様は女性に縁のない方です。ならば、セックスにも縁がないということ」
「まぁ……そうだけど」

「パイズリできるチャンスが訪れたのですから、完全燃焼しましょうよ」
「完全燃焼……!?」
「オナニーでは味わえない、身も心も蕩ける最高の射精です」
「ッ!?　こんな美人が……そんないやらしくて嬉しすぎる提案をしてくれた……！」
射精の気配が引いたのを察したのか、王女が力を緩めた。
白っぽい先走り汁が駆け上がり、童貞の鈴口から溢れる。
その快感で彼の目尻が緩む中、彼女が告げる。
「ただ……すぐに射精したいというのなら、そのご希望を……」
「完全燃焼で！」
途中で遮り、大声で申し込む。
このまま射精させてもらってもかなり気持ちいいだろう。
しかしどうせなら、最高の快楽を味わいたい。
言われた通り自分には。
救いがたいダメ男子校生には。
もう二度とセックスできない可能性が極めて高いのだから。
「ミレット王女のパイ便器とテクニックで、完全燃焼させてください！」

「はい。わたしのパイ便器とテクニックで、完全燃焼に導いて差し上げます」
にっこり微笑む王女。
「今までたくさん感じたり、先走り汁を出してもらえましたから、次のオーガズムで大丈夫なはずですよ」
「寸止めは今の一回きりというわけですね」
コクンと頷く王女。
「そろそろね……」
膝ですり足をして、少し下がる。
「ぅ……うおッ！」
斜めに挟まれていたペニスが引っ張られ、ほぼ水平になった。
乳房も動き、ペニスの上半分を挟まれる格好になる。
「始めますね」
今度のターゲットは亀頭だった。
前兆が収まっても、出したそうにパンパンに膨れている逆三角の性感帯を擦りだす。
にゅちりっ……にゅちっ……にゅちりっ……にゅちっ……。
鷲づかみにした両方の乳房の内側を張り付かせ、こねくり回す風に扱いてくる。

「くぅぅッ……う……うおぉッ……こ、こいつは……！」
興奮しきって敏感な場所に、激烈な性感が走る。
包まれ、吸い付かれ、跳ね返され、圧迫され、擦過。
竿の全体を同時に責められていたときも気持ちよかったが、感度で勝る亀頭を責められる方が、涙が出るほど快感だった。
「うああっ……も……もう……ぐぅっ、あッで、出そうっ……出るっ……！」
亀頭が燃え上がった風に熱く、白っぽい先走り汁がどんどん溢れる。
擦られる度に追加される潤滑油に、王女の豊胸が流す汗が加わり、捏ねて扱かれる快感が増大。腰が砕けて膝が笑い、まるまる足指が床を引っ掻く。
「まだ早いです……んふ……んッ……もう少し性感を上げないと……」
あやす風に言う王女。
手もその通りに動いていた。
乳房の中で弾かれたように突っ張ったペニスが精液を出しそうになると、パイズリの勢いが弱くなる。あるいは、押しつぶす風な圧迫感が緩む。そうして、爆発を先延ばしにさせ、時間を置いたら本調子に戻る。
「う、うんっ……調整、よろしく頼むよ……ああがぁぁッ……！」

軽い寸止めはするのかよ。
エス男はこっそり思いつつ、最高の射精快感欲しさに自制して、彼女の手管に身をゆだねる。
（そにしても……うぅッ！）
快楽で理性が焼き切れそうになる中で感嘆する。
（この人……う、上手い……あぅぅッ……て、テクニシャンだぞ……）
経験豊富だとは感じていたが、ここまでとは思わなかった。
完全に、男の射精を管理している。
（おっきくて、形が綺麗で、さわり心地も最高の文句のつけようのないオッパイに、こんなにいやらしくパイズリしてもらえるなんて……オレはなんてついてるんだ！）
セックス技術も勉強やスポーツと同じで、人間が本能的に習得しているわけではない。
学んで練習しなければ、快楽を追求するプレイなどできないのだ。
その希少性を考えると、目の前のコスプレ王女が心底貴重に思えた。
こんな女の子をあてがってもらえるのならダメ人間でよかったと、悩みのタネだった自分の至らなさに、感謝したい気分になる。
「んっ……んっ……はあぁ……そろそろ頃合いですね」

「あうぅっ……う、うんッ……頃合いだよな……はあっ……はあっ」
王女の言葉にコクコク頷くエス男。
部屋の掛け時計を見ると、二十分もしていたようだ。
ペニスだけでなく、身体全体も燃えるように熱い。
エアコンは効いている。
ひんやり快適。
のはずなのだが、炎天下にいるみたいに汗だくだった。
たっぷり快感を味わわされた男根は、濃密な性感の塊になっている。
甘い痺れが強すぎて、感覚が怪しい位だ。
「お、オナニーで、はあ、はあ、ここまでチンポを追い込んだことはないよな……」
熱に浮かされたような掠れ声混じりに、ふと思い浮かんだことを口にする。
「んはあ……あくぅッ……時間をかけてやると最高に気持ちよくなれることは知識で知ってて、何度か試してきたけど……うぅ、と、途中で我慢できなくなってた……っ」
答えを期待しないひとりごとだったが、王女が応えてくれる。
「自分だけでなく、ふたりでするから……はあ……はあ……ここまで来れるんですよ」
諭す風に言う美人は、色っぽく赤面していた。

額やこめかみに、バラの金髪が張り付いている。
どう見ても、オナニーかセックスで燃え上がっている顔である。
（当然と言えば当然か）
性交渉を重ねれば、刺激された場所は性感帯の自覚をもっていく。
ゆえに。
経験豊富ということは、多かれ少なかれカラダが開発されているということでもある。
いろいろな男にパイズリしてきたと言っていたが、胸もそうらしい。
ただペニスを扱いていただけだというのに、彼女もだいぶ上気していた。
端麗な顔には汗が浮かび、白い肌に赤い色が広がっている。
顕著なのは胸だった。
赤みが増した乳輪は厚ぼったく腫れている。
小指の先みたいな乳首が人差し指の先位まで肥大していて、ときどき切なげにヒクつく。
ただでさえ大きい乙女のバストは二回りは大きくなっていた。
乳輪に向かう青筋が放射線状に浮いている。
そのすべては、ひとことで片付けられる反応だ。
（感じてるんだ……オレにパイズリしながら、興奮してくれてる！）

相手も性的に喜んでくれていることがわかると、ますます昂ぶった。
ペニスは最高潮に硬くなり、今にも爆発しそうなほど震え出す。
「あはぁぁ……エス男様のオチンチン、また大きくなってる……！」
かすかに喘いで奉仕してくれる王女の頬が、楽しそうに緩んだ。
「ミレット王女が、はあ、はあ、オレのチンポをパイズリしてるだけで感じてくれてるからさ……んおおっ……ッうぅッ……チンポ大きくなって、嬉しい……？」
「嬉しいです……んっ……はあっ……達成感でオッパイがもっと気持ちよくなっちゃう……ああ……たっぷり出してください……んふぅ……」
声が弾んでいた。
嘘臭くてもうっかり騙されそうになる態度をとることがあったが、今はどう見ても本気に見える。
胸を使ってペニスに完璧に奉仕できたことに、心底喜んでいる。
「うあああっ……え、エロい……こんなに美人なのに、エロすぎる……！」
わけがわからなくなるほど興奮したエス男は、快感で引きつりっぱなしの両足を踏ん張らせる。
「オレ、童貞なんだっ……」

快楽で気持ちが開放的になり、何の気なしにカミングアウト。
「ミレット王女のオッパイに、童貞ザーメンを吐き出したい……ッ……」
鼻息を荒くして吐露。
「ハア、ハア、膣だったら孕む位たっぷり……ね、根こそぎ出しまくりたい……！」
同年代の女子ならば、白い目で見ること間違いなしの告白に、
「ああ……そこまで言ってくれるなんて……！」
本当に嬉しそうな返答。
当局のスタッフの丁寧さは崩れ、自然体の雰囲気が口調に出やすくなってきていた。
「童貞ザーメン、いっぱい出してください！」
王女は甘ったるい声で、ダメ押しのオーケー。
思い切り射精させようという意思のこもった手つきで亀頭を扱く。
てっぺんの尖り、斜面の側面、荒々しく張ったエラ、傘の裏側。
膨張ぶりだけでなく、感度も最高潮のそれぞれに、粘く濡れた乳肌が絡み、圧迫し、擦り上げる。
種類の異なる刺激を同時に味わわせ、これまで以上の快感を与えてくる。
「わたしのパイ便器に一滴残らず、排泄してぇ！」

すっかり興奮した顔で、許可ともおねだりともつかない絶叫。
「うっ、うんッ、ハアッ、はあっ、オレの童貞ザーメンを、くぅぅ、全部出すぞ！」
全身の精気がペニスに集中していくのを感じながら、大声で言い返す。
「ミレット王女のパイ便器に、ダメ男子校生のザー汁を排泄するっ……！」
腰の奥から灼熱の粘液が駆け上がってくるのを自覚しながら、さらに言う。
「美人のオッパイをザー汁トイレにするっ……オレの精液で染めてやるぅッ！」
もう二度と、こんなに美味しい目にあうことなどありえない。
その現実を意識し、だからこその執着心と欲望を滾らせながら、射精。
「うおおおぉぉぉぉぉぉ〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」
王女の細い胸板と亀頭の先が密着した刹那、童貞精液が爆発した。
類い希な美人にして、希少な美巨乳の最奥で、ダメ男子の種汁がぶちまけられる。
ビュグゥゥゥゥゥ〜〜〜！　ビュルルルルッッ！　ビュッグゥゥゥゥゥゥゥ〜〜〜！
「ああッ……あああぁあああアアアァ〜〜〜〜〜〜！」
恥ずかしいほど乳首を腫れさせ、ひとめで分かる位にオッパイで発情した王女が、透き通った嬌声を上げた。
「んああぁっ……はあ……はあ……あぁ、出てるぅ……童貞ザーメン熱ぅいぃ……！」

パイズリの途中で崩れていた体面が、完全に脱落していた。
眉目が緩んだ、どう見ても淫乱な感情が剥き出しの顔で、うっとり呟く。
「ああ……わたしのパイ便器……っう、はぁ……エス男様のザー汁トイレになってるぅ」
乳房でしっかりペニスを抱きしめながら、胸元をじっと見る。
挟む肉棒が力強く脈動した挙げ句、アツアツドロドロの牡エキスを放つ感触をじっくり味わいながら、射精を受け止める。
「気持ちいいッ……」
心の底から悦ぶ男子校生。
「ハア、ハア、王女様のオッパイトイレに童貞ザー汁排泄するの、最高ぅッ！」
サイテーの、けれど本心からの感想を叫びながら、
「エロい顔で射精チンポを見てる美人に、中パイ射するこの快楽ぅ！」
乳内射精快楽を噛みしめる。
オナニーをするときは、せいぜいペニス全体で快楽が弾ける位だが、今は違う。
肉棒を起点に身体の隅々で快感が炸裂している。
中でも、腰の裏からペニスの範囲に起こる悦楽は鮮烈だった。
精巣から鈴口――精液が作られて送り出されるまでのプロセスが、一瞬で行われている

かのような感覚で、しかも全身の精気が精巣に集まり、ザーメンと一緒に駆け抜けていくような錯覚もある。一回放つ度に、そんな気絶しそうな快楽を覚えるのだ。
「こんなの初めてだ！　パイズリが……テクニシャンの美人とのセックスがっ……こんなにいいものなんて知らなかった……想像以上だッ！　ほんとに完全燃焼って感じだぞ！」
正直な気持ちを吐露していると、王女が動いた。
すり足で距離を詰め、肉棒に上を向かせる。
最初に胸でしっかり挟んだときの体勢だった。
「ああン……そんなにわたしのパイズリがよかったの？　嬉しいわぁ……！」
胸の中から亀頭だけを出させた状態で、胸奉仕。
下から上へと力強く、精液を搾りとる気持ちに満ちた所作で、射精童貞ペニス扱き。
「もっと出してっ……んっ……んふっ……もっと完全燃焼してエス男さまァ」
うっとりした顔で、パイズリ射精をおねだりしてくる。
「ああッ……また出る……で、でもマズイッ……このままだと王女の顔にかかるッ！」
「構わないわぁ、むしろかけて、あン、あぁン、かけて欲しくてこうしてるの」
嘘や演技には見えなかった。
胸で扱かれてビクンビクン震えている亀頭を見る目は、完全に待ち遠しそう。

今し方出会ったばかりで、恋人でもない男子校生の童貞精液で、汚して欲しくて堪らないとばかりに、淫乱な顔をしている。
可愛らしいピンク色の舌をつきだす仕草などは、餌をねだる牝犬にしか見えない。
（この美人コスプレ王女、ヘンタイのケがあるぞ……エム女くさい！）
エス男が思った瞬間、嗜虐の感情が燃え上がった。
劣等生だからこそ、日頃抑圧されている攻撃的な感情も沸き、射精欲求に加わる。
「出すぞミレット！」
声を張り上げてサイテーな宣言。
「そのチョー綺麗な顔もトイレ扱いしてやるっ」
執着心混じりの愛欲たっぷりに、変態的な約束をする。
「ダメ男子校生の童貞ザーメンの排泄先にして、ぐちょぐちょに汚くするぞ！」
「はあぁぁぁンンン〜〜〜〜〜〜！」
王女の感極まった声が響いた。
「お、お願いしますっ！」
最高に硬くしこった乳首を震えさせながら、下品におねだり。
「王女であるわたしの麗しい顔をっ……」

他の女ならば絶対に口にしないはずのセリフを、
「ダメ男子校生エス男様の童貞オチンポエキスでぐちょぐちょにしてぇ！」
心底本気の声で伝える。
淫乱美女の哀願を聞き届けた瞬間、エス男は放った。
「おおおおおおおッッッッ！」
極上のオッパイに竿を包まれながら、
「ドエロ王女の顔に射精！　顔便器に童貞ザー汁ぶっかけぇ！」
被虐の雰囲気を醸し出す王女の美顔めがけて発射。
ビュッグゥゥゥウウウ～～～～～！　ビュルッッッ！　ドビュルゥゥゥウゥ～～～～！
胸の中で何度も出したにもかかわらず、まるで初回のように粘く熱い牡エキスが飛ぶ。
ビチャッ！　ベチャッ！　ベチャチャチャチャッ！
「あああンンン！」
噴出する新鮮な汁の塊は、むせかえる青臭さを放ちながら、美顔全体にへばりつく。
艶やかな金髪の前髪に、汗ばんだ後れ毛に、赤面した目の下に、物欲しげに突き出されたピンクの舌に、そうそういない美人の顔に張り付いて、落ちずに居座る。
「熱い！　キツイ臭ぃ！　すごく苦ィ！　ああン、ドロドロべたべたの童貞ザー汁ぅ！」

なんと、王女は大喜び。
「わたしの顔をトイレ扱いしてぇ、本物の顔便器にしちゃってるぅぅ〜〜〜！」
いくら性的に昂ぶっていても、普通の女性ならば屈辱と嫌悪で怒りに燃えるはず。
なのに。
目の前のコスプレ王女は、まるで絶頂しているかのようにうっとりしている。
やはり、嘘や演技には見えない。
（美人なのに、ヘンタイっケありありだっ）
胸中で叫ぶエス男。
（こういうサイテープレイで悦ぶ牝エム女なんだ……！）
童貞劣等生の心が沸き立つ。
（うあああああ！）
どうしようもなく歓喜する。
（こんなエロい王女様に、パイズリでヌいてもらえた……顔射させてもらった……しかもノリノリで……大喜びで！）
どうしようもなく嬉しくて、気持ちよくて、完全燃焼の極楽射精を繰り返す。
「あはぁン……まだ出てる……ああ、すごいわ……なんてすごい童貞チンポなの……？」

唇についた牡汁を舌なめずりで舐めながら、エス男のペニスを褒める王女。
放たれて、受け止める。
ふたりの快楽追求行為は十分も続いてようやく終わった。
「はあ……はあ……あぁ、ほんと最高っ……！」
「んふ……あふぅ……はあ……はあ……気持ちよくなってもらえてよかったです……」
奉仕された男子校生だけでなく、奉仕した王女も満足そうな顔で言いあった。